

は四本ともほぼ同じ形態をなすもので、最も残存の良いものは全長四〇・八センチメートルを計る。鉄刀は先端部が欠損しているが、全長四〇センチメートル前後で、茎の長さは八センチメートルである。刀子のうち二本は茎の部分が蕨手の形態をなすものである。針は先端部が折損しているが、長さ九センチメートル前後と推定され、基部に糸を通す針穴がある。

### 遺跡の性格

発掘調査報告書では、1号墳は「豊津地区としては、その内部主体、副葬品の状況から、四世紀後半頃の司祭を兼ねた地域集団の首長クラスの墳墓であり、惣社古墳群が、その一族に属するものであったとも考えられる。」とされている。当古墳は町内で最も古い時期に属する古墳であり、数少ない前期古墳である。また、墳丘の規模が直径一八メートルあることから被葬者は首長層であることは確実である。更に、内部主体が苅田町石塚山古墳のような竪穴式石室ではなく箱式石棺であることから、被葬者は在地的な性格が強い首長であったと考えられる。

### 二 彦徳甲塚古墳

彦徳甲塚古墳は豊津町北部で、八景山に延びる豊津丘陵の一支丘にある。古墳は鞍部が広く平坦な丘陵尾根線の東側に位置する。北東方向には京都平野が広がり、南西側は今川中流の犀川町本庄周辺の盆地を眼下に見渡すことができる。標高は約四二メートル前後である。

この一帯には、古墳時代後期の中小の古墳が数多く分布する。この古墳群の南部には六世紀後半代の直径二〇～五〇メートル程度の中規模古墳が甲塚方墳を含め五基点在し、北部の八景山周辺には同時期の直径一〇～

#### 第4章 古墳時代

前後の小古墳が十数基群集する。また、更に北方の行橋市竹並の丘陵地帯には五世紀後半から八世紀初頭にかけての横穴墓群が一五〇〇基程度営まれ、古墳時代後期では京築地区最大の墓地を構成していた。なお、甲塚方墳の西方約四〇〇メートルにある行橋市矢留の奥山古墳も五世紀以前の竪穴式石室を主体部とする古墳である。

当古墳はその外観が雄大で、かぶと兜を伏せた形を連想させることから、甲塚の地名の由来となったと言われる。県内でも珍しい二重の周溝をめぐらすことから、昭和五十六年三月五日に県の史跡指定を受けている。しかし、昭和五十九年七月十四日宅地造成を目的として、突然重機による破壊を受けた。この際、内部主体として石室が存在することが確認されたが、学術的な調査をするには至らなかった。その後、昭和六十一年度から平成元年度にかけて、史跡公園化を図る環境整備工事が実施された(第11図)。また昭和六十二年



第11図 彦徳甲塚古墳全景 (整備後)

には周溝のトレンチ調査が部分的に行われた。

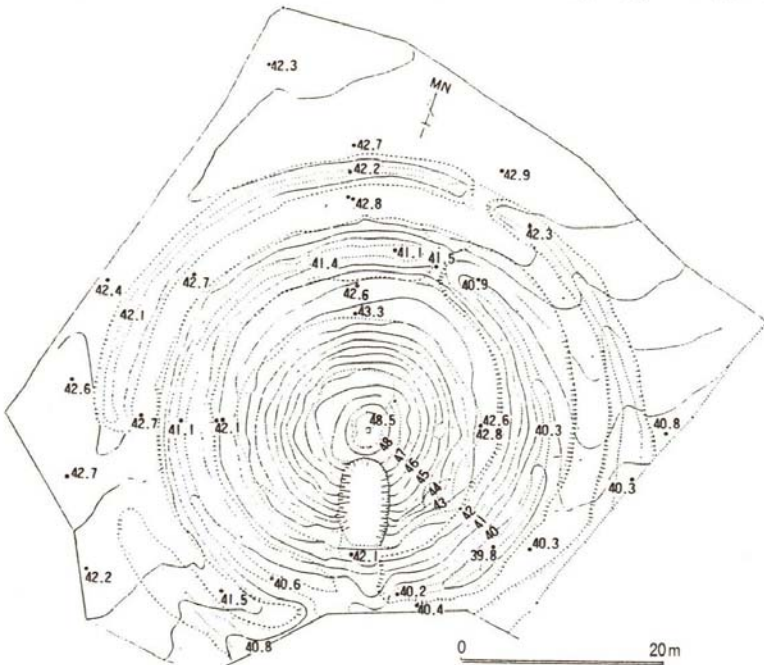
遺跡の詳細

当古墳の現状は、昭和五十九年の破壊とその後の整備によ

って、旧状とはやや相違してきているが、破壊前の測量図(第12図)によつて墳丘の形態を復原することができる。

墳丘の盛り土は、周囲にめぐらした二重の周溝を掘削して得た土を利用したと考えられる。高さは標高約四八メートルで、墳丘周辺との標高差は北側で約六メートル、南側では約八メートルある。盗掘坑が墳丘南斜面にあり、地形も南側が低くなっていることから、石室の入り口は南側にあることが想像される。墳丘盛り土部分の直径は約二四メートルである。また、盛り土部分と内側の周溝との間には、幅一〜二メートルの平坦面をめぐらしている。

内側の周溝は、トレンチ調査の結果幅五



第12図 彦徳甲塚古墳測量図

八メートルで、深さは北部で一・五メートル、西部では二・一メートルを計り、直径は東西径四二メートル、南北径四〇メートルである。また、内側の周溝と外側の周溝との間には幅二〜四メートルの平坦面がある。外側の周溝は内側よりやや小規模で、幅三〜五メートルで、深さは北部が〇・七メートル、西部が〇・六メートルである。直径は外周で東西径五六メートルである。内外の周溝とも北部で陸橋状に溝が切れる部分がある。なお、周溝の断面形は、両者とも基本的に逆台形をなす。

### 遺跡の性格

当古墳の築造方法は、墳丘に段を設けるものではないが、内側の周溝の幅が広く、墳丘盛り土との間に平坦面を設けていることから、外観上は二段築造の古墳に見える。この外観を重視するならば、甲塚方墳の三段築造と相通じるものである。

築造時期については、遺物の出土がなく、主体部の構造も不明のため確定はできないが、北東部に隣接する甲塚北古墳との墳形の類似性や周辺古墳群の時期から考えて、六世紀後半代の造営であろう。

京都平野内の後期古墳では、段築で墳丘を造る例は少ない。当古墳周辺のこの時期の墳墓は、その施設の内容や規模・数などから三つのグループに大別することができる。第一は行橋市竹並から西方に同市矢留地区を経て馬ヶ岳に延びる花崗岩バイラン土の硬質層に営まれた数千基からなる横穴墓群である。第二は八景山から彦徳・高崎地区を経て馬ヶ岳に広く分布する直径一〇メートル前後の小古墳群で、全体で数十から一〇〇基程度が存在すると予想される。第三のグループが彦徳東部から八景山南方に築造された、彦徳甲塚古墳・甲塚方墳など数基からなる、二〇メートル以上の墳丘を持つ古墳群である。第三のグループは、京都平野南部の旧仲津郡に相当する地域内では、犀川町本庄地区の姫神古墳・大熊古墳など四基の前方後円墳からなるグ

ループと並び最も大形の古墳が集中する古墳群である。このグループの古墳を築造した階層は、六世紀後半代に旧仲津郡で大きな勢力を有していた地方豪族の一つと考えることができる。

### 三 甲塚方墳

甲塚方墳は北方に延びる豊津丘陵の先端近くで、八景山の南側鞍部に位置し、標高が約四〇メートルである。所在地の住所は大字国作字甲塚である。

当古墳が所在する丘陵一帯は、弥生時代以来集落や墓地として利用されており、古墳時代に入っても祓川の沖積平野を生産基盤として、人口が集中していたと考えられ、五世紀代以降中小の古墳が多数築造されている。当古墳の北東一〇〇～二〇〇メートルには六世紀後半に築造された八景山南麓古墳群があり、かつて九基の円墳が確認されていたが、現在では七基のみ残存している。南方には、同時期の径二〇メートル前後の中型の円墳四基が一群を構成している。更に、南西約五〇〇メートルには、彦徳甲塚古墳、甲塚北古墳の二基の中型円墳がみられる。これらの中で、甲塚方墳は最大の規模を誇る方墳である。

#### 調査経過と遺跡の概要

当古墳の存在は、その大きさゆえ以前から知られており、大正期には内部の石室が大師講の祭場として利用されていた。調査時点での遺跡の保存状況は、全体としては良好であったが、墳丘の北東側が宅地によって削平され、西側も道路によって破壊されていた。また、石室は複室構造の横穴式石室であったが、前室部の側壁上半と天井部の石が完全に取り去られていた。

発掘調査は環境整備の事前調査として、破壊された石室を復元するとともに、墳丘の構造を解明した後、